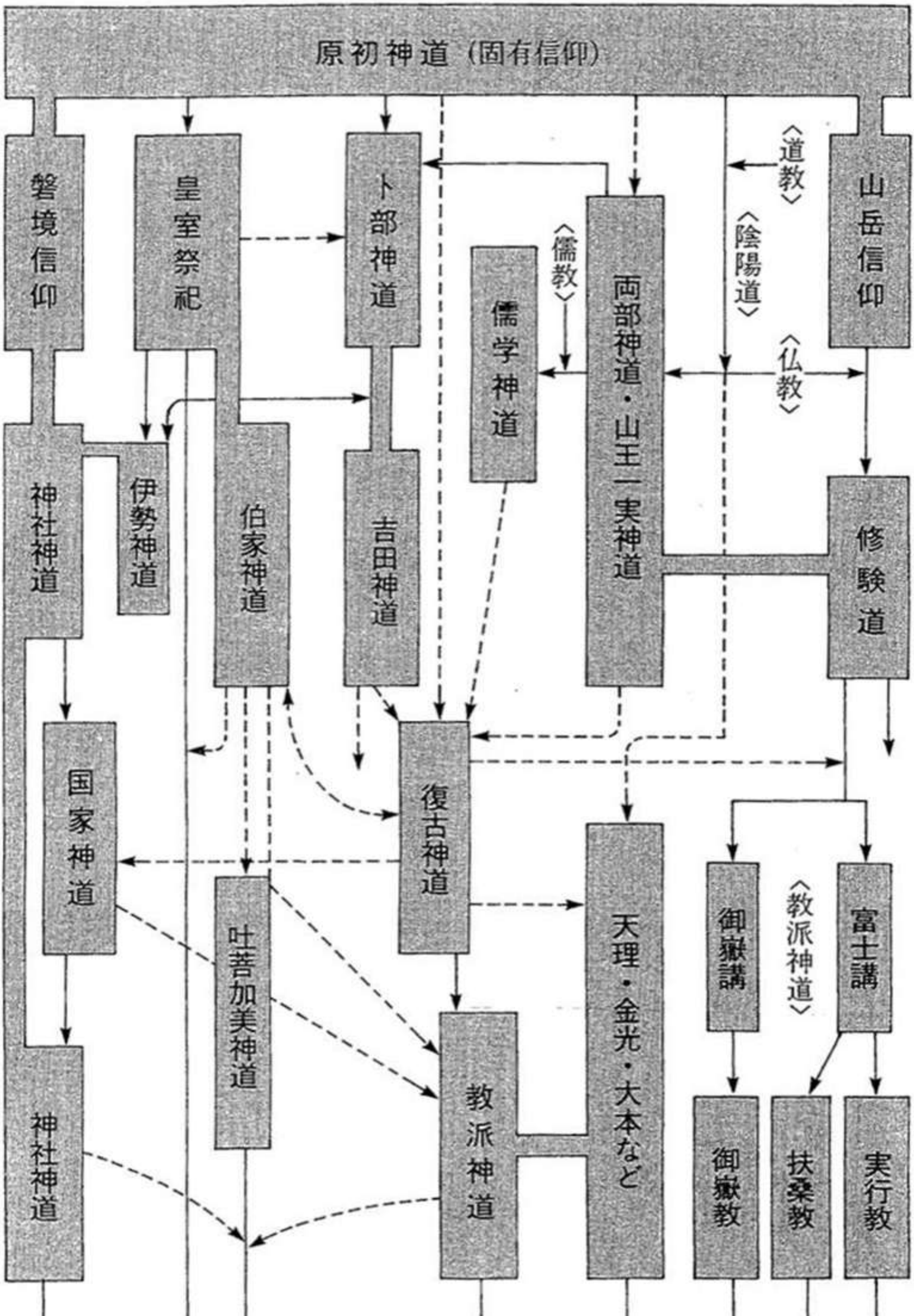
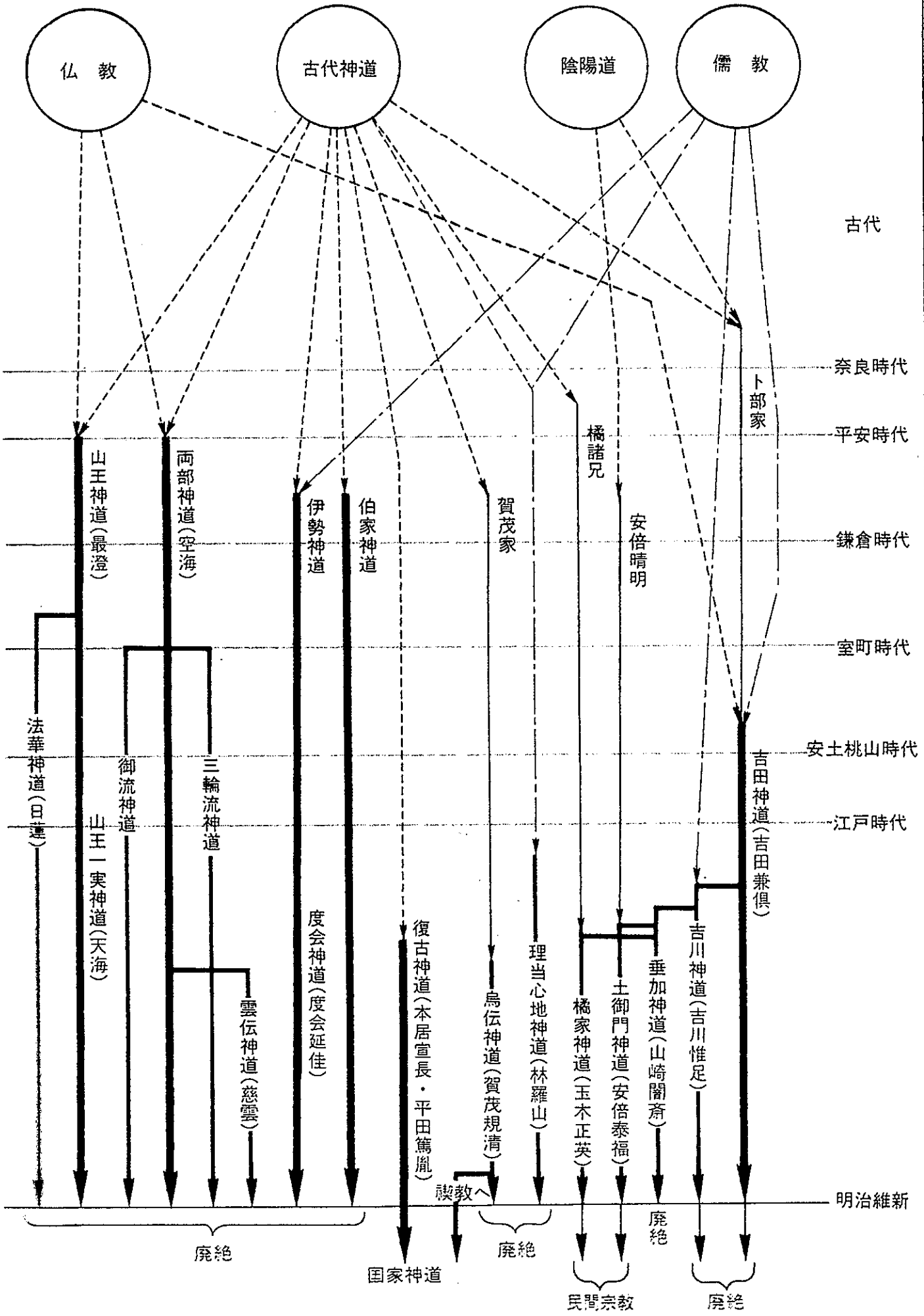
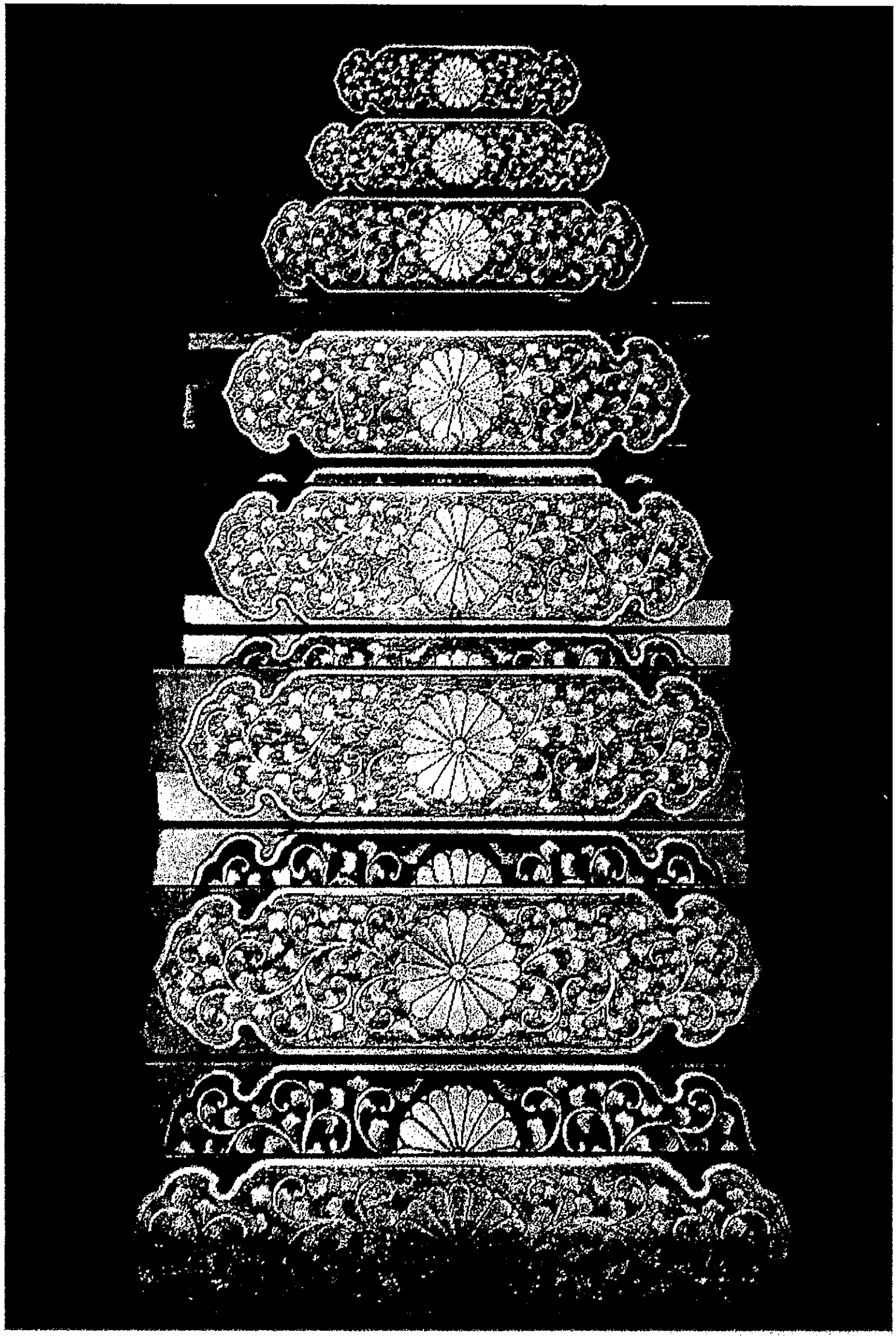
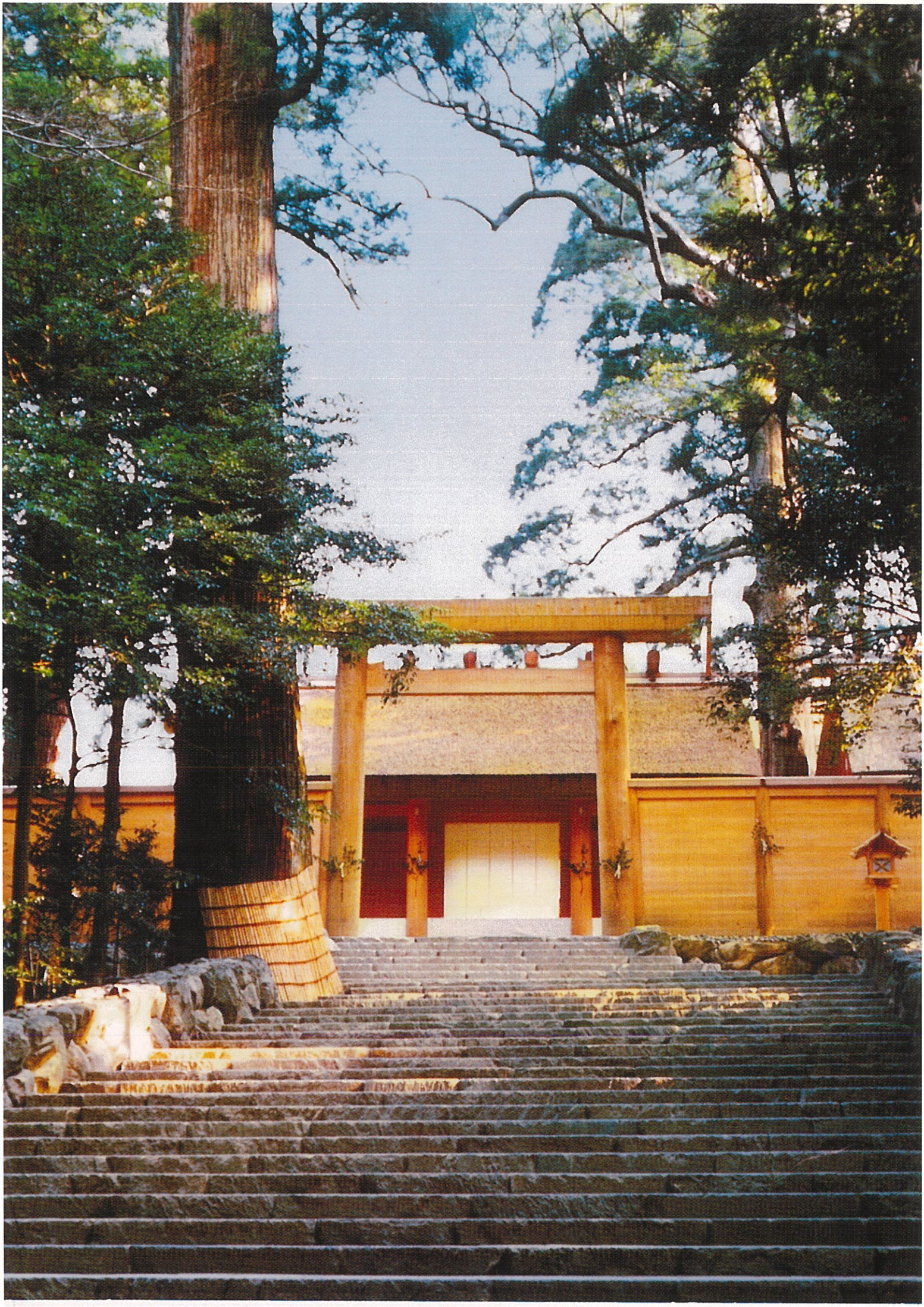

原初神道（固有信仰）
磐境信仰
皇室祭祀
卜部神道
〈道教〉
〈陰陽道〉
山岳信仰
〈儒教〉
儒学神道
両部神道・山王一実神道
〈仏教〉
神社神道
伊勢神道
伯家神道
吉田神道
修験道
国家神道
復古神道
天理・金光・大本など
御嶽講
〈教派神道〉
富士講
吐菩加美神道
教派神道
神社神道
御嶽教
扶桑教
実行教

神道史チャート


仏教
古代神道
陰陽道
儒教
古代
奈良時代
平安時代
鎌倉時代
室町時代
安土桃山時代
江戸時代
明治維新
卜部家
橘諸兄
安倍晴明
賀茂家
伯家神道
伊勢神道
両部神道(空海)
山王神道(最澄)
法華神道(日蓮)
御流神道
三輪流神道
山王一実神道(天海)
雲伝神道(慈雲)
度会神道(度会延佳)
復古神道(本居宣長・平田篤胤)
烏伝神道(賀茂規清)
理当心地神道(林羅山)
吉田神道(吉田兼倶)
橘家神道(玉木正英)
土御門神道(安倍泰福)
垂加神道(山崎闇斎)
吉川神道(吉川惟足)
禊教へ
廃絶
廃絶
国家神道
廃絶
民間宗教
廃絶

京都御所・承明門から見た紫宸殿。奥の高御座がライトに浮かび上がる





神人感孚

多田山谷

川面先生紀念事業會の御様子拝承。

元来馬場愿治博士の如き川面学を知らざる者が、川面先生亡きあとを預るなど言語道断の僭越にして、稜威會を冒涜し先師の徳を穢すものに候。

霊を一（ヒ）とも三（ミ）とも云ふぞと川面学は教へたれども、遺弟中唯一の道統受授者と称せらるる高橋止観も、嘗て其の理を聞かず知らずと答へられたれば、遺弟一萬之れを知るものは無かるべし。

一にして三なりとは、祕事は祕事なれども説き得ざるものにはあらず、蓋、知らざりしが為に説くこと能はざりしのみ。

一即三、三即一なりと云ふが故に耳に入り難きのみ。

霊なる実体は不一にして不二にして不三不四にして五なり。

之れを「カミ」と日本民族は伝承し来れるなり。

古老は之れを図解して・◎◎とし「一二三」とも「日経身」とも教へて中心と外廓との聚散離合、生死遷流の大道を伝承する方便なるのみ。

「五」とは数なれども「イ」とは言にして「生命（イ）」と呼ぶ。

「イノチ」にして顕幽一貫との義なり。

「イノチ」とは元より死に対する生にはあらず、神代の神の神言霊に候。

神國築成

カミナガラ カミノカミワザ アノナルヤミナカノカミト カミカカリマス

多田雄三

人間心渾沌天地未剖唯有萌芽而耳矣。
日神事功成而天地初發而人間※神矣。
天狭霧國狭霧天讓日國禅日之日神成生
於高天原也矣哉。　※解読不明

天御中主大御神

九州の一角宇佐ノ地ニ「あまのみなかぬしのおほみかみ」ノ傳有リ。先師川面凡児先生ハ之レヲ以ッテ宇宙観ヲ創造シ國家観ヲ樹立シタリ。

然レドモ、「あまのみなかぬしのおほみかみ」ヲ古事記ニ記載シタル天御中主神ナリト思ベリシハ甚シキ誤謬ナリ。

カカル誤謬ハ神ト尊ト命ト大神ト大御神トヲ等シク「かみ」ニシテ、大小長短ノ差別カ或ハ単ニ敬称語ナリト妄断シタルガ為ニ起リタル過失ナリ。

「あまのみなかぬしのおほみかみ」トハ「あまてらすすめおほみかみ」トタタヘマツルトヒトシキカミコトタマニシテ、神トシテ人ノ認メ得ザル隠身デ、大平等トカ、無邊際トカ云フ意味デ、数学的ニハ零デ∞デ極大デ極小デ、物トシテハ質モ量モ無イ質量デ、神儀トシテハ天津金木ト呼ビ、行事ノ上デハ太遍遼ト称ヘテ神魔群團身タル八耳命ニテマシマスナリ。

「やつみみのみこと」ガ「あまのみなかぬしのおほみかみ」デ、「あまてらすすめおほみかみ」デアラセラルルコトハ、僅ニ「天照皇大神宮」ト教ヘラレタル大麻ニ依ッテ窺ヒマツル外ニハ高天原ノ神傳ガ有ルノミナリ。

「天照皇大神宮」ト教ヘラレタルハ「あまてらすすめおほみかみのみや」トノ意ナレバ、境地デ、住處デ、資料デ、國土デ、國常立デ、幸幸デ、止ラザルノ日デアルカラ日止ナラザルノ物ダトモ、神ナラザルノ神ダトモ、別天神ダトモ称ヘマツルノデ、之レヲ図示スルニハ○カ●カ□カ■カデ、一音ナラバ「ひ」カ「ふ」カ。之レヲ無人ノ人ト呼ビテ大正人道教主人ナリ。

之レヲ大正人道教主人ト呼ブハ、直日ナリトノ意ナレバ天祖デ、天讓日デ、國禅日デ、日ナラザルノ日デ、光ナラザルノ光デ、一ナラザルノ一デ、一切デアルトノ意ナリ。

一切ナリトハ無デ、無キ物デ、生滅デ、不生滅デ、人ノ身トシテハ知ルト云フノデハナク、悟證ヨリ外ハナイ。

此ク悟證ル方圖ヲ脩禊ト呼ブハ、太古以來各國各民族ガ傳ヘ來リ、習ヒ覚エタル神事ナリ。

其ノ祓禊ヲ行ズル注意トシテハ、

第一　人我ノ見ヲ捨ツルコト。
第二　神言靈ヲ観ルベキコト。
第三　天眞井ノ水ヲ仰ギマツルベキコト。
第四　一神ハ日神ニシテ両儀ナリト知ルベキコト。
第五　言ハ神ナリト悟證スベキコト。
第六　相モ神ナルコトヲ悟證ルベキコト。
第七　此クテ上下内外一團ノ光明體トシテノ神國ヲ築キ成スベキコト。

等ナリ。

以上　昭和十五年五月廿九日筆録

三峰の山の青葉を飜す、眞昼の風を
荒川の、流るる水を塞止むる、夜半
の氷を神の代の、神の治らして、人
の身の、此くとこそ知れ、神ながら、
かみのまにまにかみかかります。
ああひがてんじんゆうあいこう。

今、之を拜みまつれば、瑞祥は燦然として、その靈異まことに量り難きものがある。爲に、その高弟と呼ばるる人達でも、時に甚しき誤解の悲劇を演じて居る。が、鎭魂殿裡に坐して、迷雲を攘へば、白雪は碧波を潛りて、天御鏡鏡の船の妙相を示し、涼風は翠松に宿りて、窟戸開く神楽の歌の妙音を奏で、櫻雲は姫群を裹みて、天祖奉齋報本反始の道を敎へ、霜葉は菊花を圍みて、伊頭の雄走天津神輪の尊容を現すのである。

みをしへの、きみがみたまは、ぬほことり、今も立たせり。世に在りし如。

ささの葉の、さやさやとして。鈿女子が、舞ひする小袖、手火に映えたる。

あな異靈。雲紫に舞ひ降り、朝まだきにし、君が出でます。

まがごとも、ただひとことの、かつらぎの、神の神輪ぞ、照りに照りたる。

第二節

先師は、日本神道の傳統に就て、古事記流、日本紀流、舊事紀流、祝詞流、物語流、等と擧げられた上で、それ等は皆、語部の流で、中央と地方と、全國各地に在つた語部の傳を書き記したもので、其のまた語部の傳とは、悉禊の傳から分流したものであると敎へられたが、その禊とは、結局、宇宙の大道を明にして、大道のままなる神身を築き、大道のままなる大日本天皇國であることを確認して、全世界人類の覺醒を促し、渾球一圓、平和嘉悅の神國楽園なりと相互に謳歌せしむる行事である。それは、古典の明記するところであるが、其の事本來、幽遠神祕高大深奥であるから、末流時に濁り、枝葉或は亂るることがある。從つて其の流を明にし、目標を

居た。歌が有り詩が有るだけで、それを謳歌し諷詠するのみで滿足だつたのである。それを聞き違へ傳へ誤つて、齋部廣成と云ふ老人は、「上古の時文字有らず」などと變なことを書いたものである。

語部と白す役は、文字の無い爲に口から耳に語り傳へたのであらうなどと思ふならば、とんだ間違ひである。それは、神の系圖を歌ひ譽め讃へつつ「言靈の幸」を仰ぎまつるので、文字の有無とは固より何の關りも無い。

朝廷の語部は、天業繼紹の祕官であるからとて「斗禰（トネ）」と稱し、その讃歌は日嗣史で天界築成の祕曲である。各國各縣各郡鄕村等、地方地方の語部から家家の語部に到るまで、語部と云ふ語部は總べて、人間出生以前の記錄を主として、人間世界の標識基準を指示すると共に、人間死後の道しるべをも與へ、過去と將來と現在との何如にして起滅するかを明にし、神界と魔獄との消息を敎へて處世の方針を知らしめ、人生經綸の大綱から細目までをも授け給へる神勅である。

朝廷に於ける語部は祕官だから、歷史の表面にあらはれて居ないのが當然だが、天武天皇の勅に依り、太安萬侶の修史に依り、稗田阿禮の名を知ることが出來たのである。ところが、此の語部は古事記編纂を境として其の後また聞くことが無い。

先師の說に依ると、日本神道の傳は色色の流れが有つても、それ等都べてが禊流の神傳から分流したものだとなりますが、その禊行事が儒佛等の爲に災されて、朝廷御祭事の上にまで影響するやうになり、何時とはなしに一般世間からは忘れられ、僅に一部古老の間にのみ祕め行はるる狀態となつた。それはそもそも、何故であらうか。

蓋聞く。

今、之を拜みまつれば、瑞祥は燦然として、その靈異まことに量り難きものがある。爲に、その高弟と呼ばる人達でも、時に甚しき誤解の悲劇を演じて居る。が、鎭魂殿裡に坐して、迷雲を攘へば、白雪は碧波を潛りて、天御鏡鏡の船の妙相を示し、涼風は翠松に宿りて、窟戸開く神楽の歌の妙音を奏で、櫻雲は姫群を裹みて、天祖奉齋報本反始の道を敎へ、霜葉は菊花を圍みて、伊頭の雄走天津神輪の尊容を現すのである。

みをしへの、きみがみたまは、ぬほことり、今も立たせり。世に在りし如。

ささの葉の、さやさやとして。鈿女子が、舞ひする小袖、手火に映えたる。

あな異靈(アヤシ)。雲紫に舞ひ降り、朝まだきにし、君が出でます。

まがごとも、ただひとことの、かつらぎの、神の神輪ぞ、照りに照りたる。

第二節

先師は、日本神道の傳統に就て、古事記流、日本紀流、舊事紀流、祝詞流、物語流、等と擧げられた上で、それ等は皆、語部の流(ナガレ)で、中央と地方と、全國各地に在つた語部の傳(ツタヘ)を書き記したもので、其のまた語部の傳(ツタヘ)とは、悉禊の傳(ツタヘ)から分流したものであると敎へられたが、その禊とは、結局、宇宙の大道を明にして、大道のままなる神身を築き、大道のままなる大日本天皇國であることを確認して、全世界人類の覺醒を促し、渾球一圓、平和嘉悅の神國楽園なりと相互に謳歌せしむる行事である。それは、古典の明記するところであるが、其の事本來、幽遠神祕高大深奥であるから、末流時に濁り、枝葉或は亂るることがある。從つて其の流(ナガレ)を明にし、目標を

慥にする爲には、「神傳」を得なければならぬ。

先師が、禊の行事を門人に傳へられた最初の遺蹟は、相州片瀬の濱である。此こは、東海孃子の神域であるから、古老は傳へて、遮邇の寶殿と呼び、第一の宮には、幸魂の神の神鎭り、第二の宮には、奇魂の神の神鎭りまし、第三の宮は、荒身魂八千矛の神の神鎭り居ます荒祭宮にてまします。此の三女神殿の禊を脩めたる後には、志加嶋海の祕宮を拜み、更に改めて、「燔祭」の祕儀を行ずるものである。此の祭式は、太古以來身魂齋(ミタマツリ)の最祕として、全世界各地に傳はつたのであるが、現在日本では、出雲日御崎神社の嚴儀が最名高い。此の御社の傳へは、須佐之男命の神傳で、根堅洲國築成の祕事である。

神劒一閃光焰天。魔類消散旭日輝。

火產靈(ホムスビ)の神性仰ぎ、經津主の氣吹の祓、今知らすなり。

思ふこと遂げで止むべき。大丈夫の、矢竹心のただ一筋に。

乾坤旋轉、人天往返。東天西海唯一點。四維上下天皇國。今日拜得祕宮之火。

「禊は傳統を尊ぶ」ので、唯、見眞似聞眞似で爲るやうなことは、固く戒めねばならぬ。「彼の神を拜みまつらんとせば、宜しく其の神の御象をあらはしつくりて、をぎたてまつるべきなり」と、古典にも明記してある。

植ゑ置きし、籬の菊は、西東、庭を狹しと、香ひこそ增せ。

古の香をかぐはしみ、橘の、小門の水戸に、人ぞ寄るなる。

道は一つである。けれども、時は遷り、處は變る。伊邪那岐命の御身之禊は、中津瀨にて行はれ、最後に、三貴子を得させ給へりと記されてある。大嘗祭の御禊(ギョケイ)とは、前二日の御儀で、古は、天皇御親(オンミヅカラ)河の邊に臨みて行

はせられ、近世は、京都御所中の小御所にて行はせ給ふ。其の御儀は、二十九分間にて御完了になられる。さうして、天皇、皇后、皇太后、三陛下の御行事だと漏れ承るのである。

國家の定めたる祭式も、遠く延喜式以後の變遷を擧ぐるまでもなく、明治時代からでも幾度となく變つて居る。さうしてそれは、絕對の意味に於ての好いか惡いかではない。唯その時に合ふか否か、或は其の人に行ひ得るか否か、又或は、其の處に相應するか否かである。

形式は固より大切であるが、祭典の本義を忘れてはならぬ。さうでなくて、自分の習つた形式のみが唯一眞實のものだなどと思つたならば、それは、とんでもない横路で、墓守の小屋路で、守株の斷崖で、膠着の琴線で、痴人もなほ且夢見るを耻とするところである。

第三節

先師は常に、古典の對讀を教へられたが、舊事紀の傳へは、日神奉拜の神事から入(ハイ)るのである。その祕言靈を古老は、

天津神輪、國津神輪の、神挂り。挂るを見れば、月圓なり。

と教へて居る。

此の祕言靈を證するには、最初に祓祭を行ひ、葦原中國に在りと有る限りの禍津毘をば、我が一身に引き受けて、調伏摧破救出しつつ、禊祭に移るので、之は、「靈界往返の神傳」と稱ふるのである。先師の定められた祭

器に、特別の形式を存するのも、此の祕事に依るのであり、また、世にも有り難く、限り無き伸展性を有する「祭式」を遺されたのも、その故である。

ところが、世にはまた、自由と放縱とを取りちがへるものの有るやうに、此の祭式をも誤解して、鬼窟に墮つるものが存ると聞くのは、何とも嘆かはしき限りである。

そのやうなものを救濟する爲に、古老の傳へた三種の神言がある。

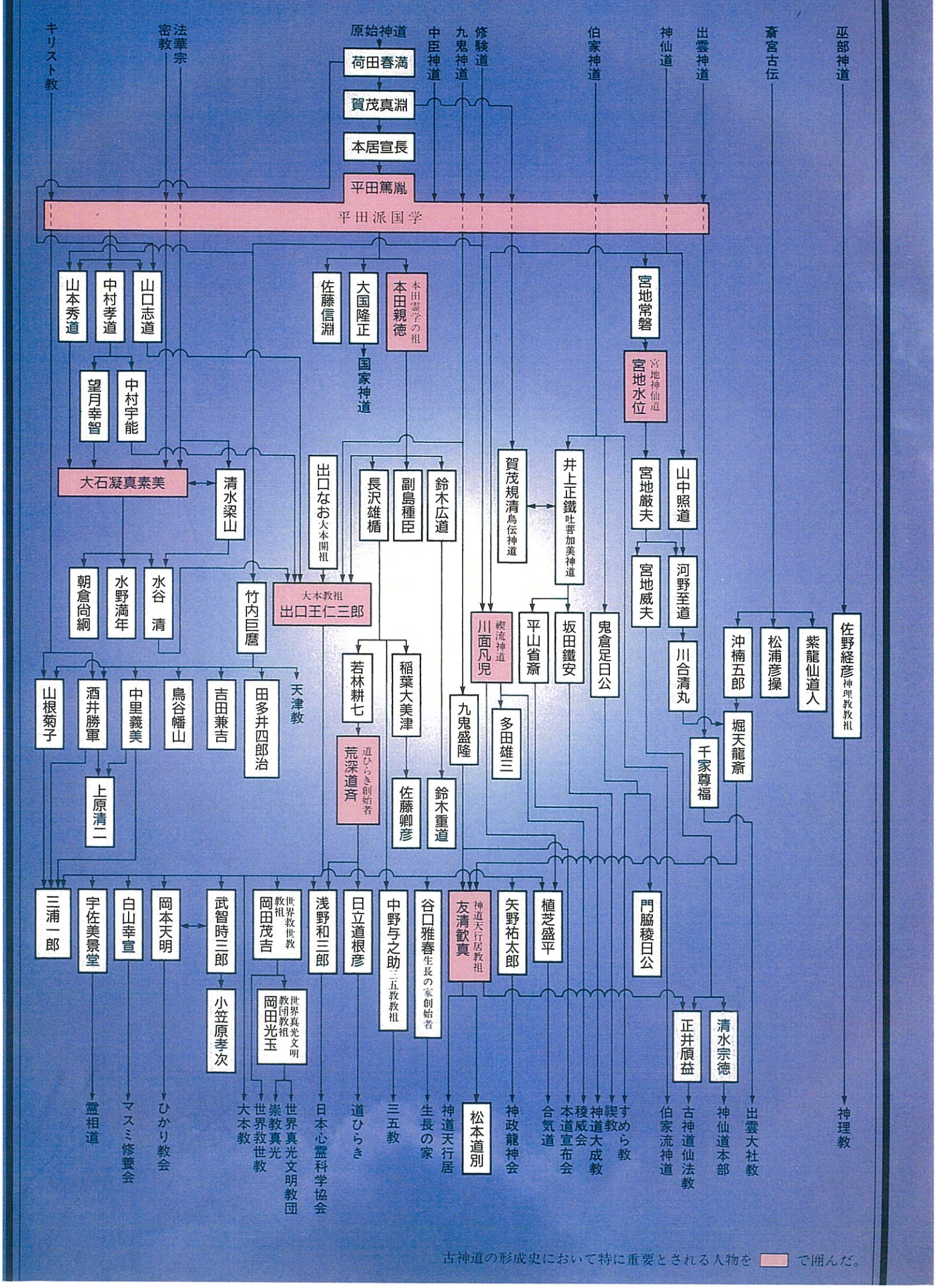
蟹が行く。ひとりか歩む。足さはに、汝が歩む途。足長く、汝が行く道の。道無きか。道失へばかや。玉矛の、すくには行かで。玉きはる、內外もわかで。横ざまに、など横道に。今日もかも、迷ひ惑へる。明日もかも、闇途たどたど。」豐受の、神の御惠。渡津見の、御心深く。汝が迷ひ、解かし給ふと。汝が惑ひ、醒まし給ふと。潮水、たぎつ釜ぬち。迦具土の、焰の上に。汝をば置き、汝を舁き据ゑて。平らけく、うたげはすべく。安らけく、うまいはすべく。神の代の、神の御神楽。歌ひつつ、また舞ひつつも。横ざまの、道無き歩み。烏羽玉の、闇道の迷ひ。今覺めよ、今日醒めよとぞ。」大やまと、すめらが軍。西東、南に北に。ゑみしらを、和はしつるかも。禍つびの、禍のことごと、和はしつるかも。　・一〇

桃の花、赤く燃ゆれば、彌生ぞと、少女は舞へど。梅の花、散りてし行けば。櫻咲くと、人は歌へど。山陰は、まだ氷ゐて。山裾は、霜さへ置きて。故郷の、花の便は、何時と知らなく。　・一〇

時告ぐる、鞁の響きに。庭の小笹、動くかと見ゆ。來寄るとぞ思ふ。　・一〇

此の三種の神言を稱へて後、稜威會の紀念祭に仕へまつり、先師の遺された「祝詞」の一部をも奉稱しながら、神威を畏み、神德を仰ぎまつる。

【古神道・霊学系譜チャート】



古神道の形成史において特に重要とされる人物を　で囲んだ。

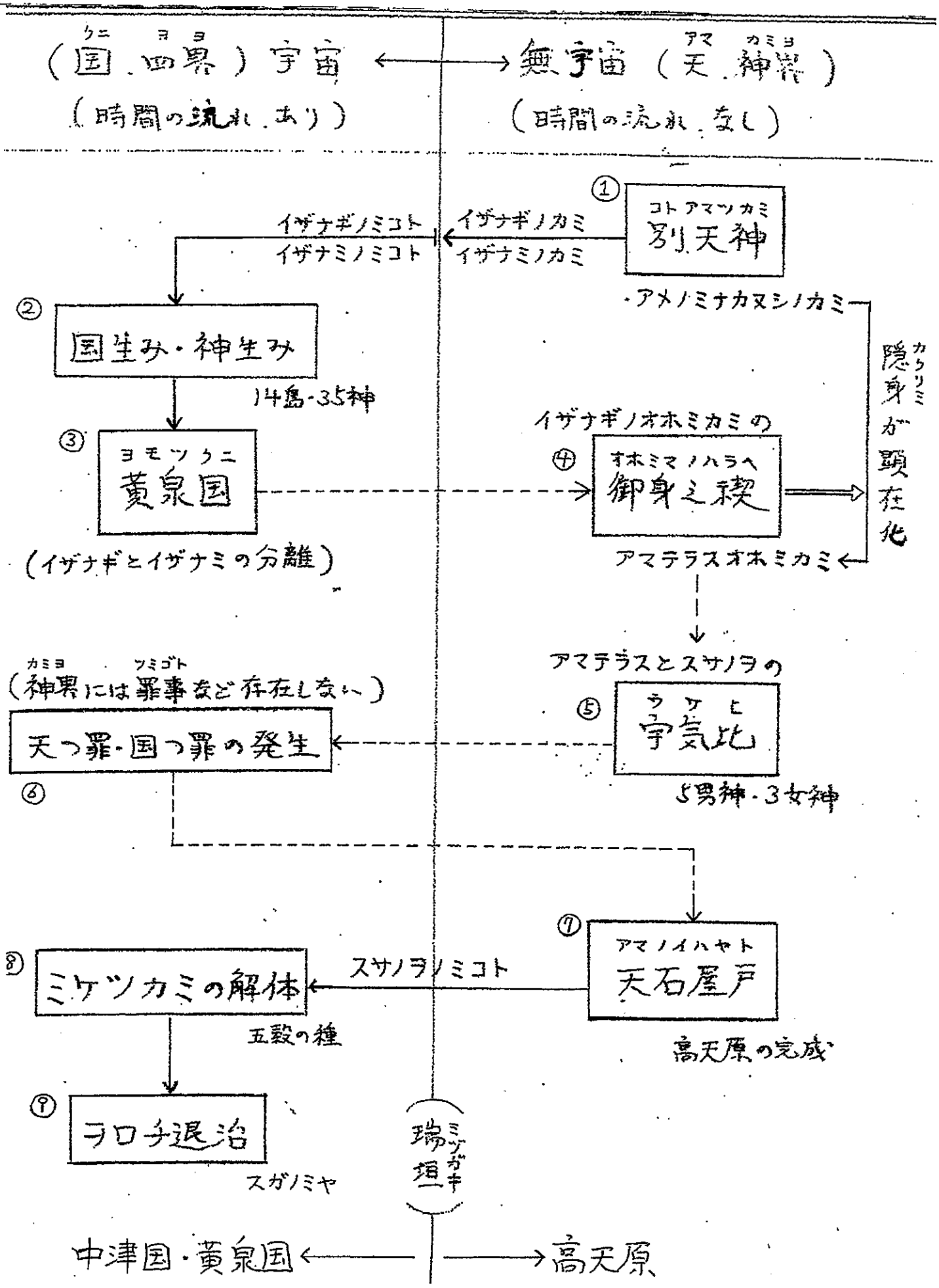
多田雄三先生
大正九年神嘗月二十八日
　明治神宮新殿祭奉仕記念

（二）宇宙大中心の高御座の位置

祖神の垂示に於いては根本大本體神の位置としての高御座あり。人類萬有の出發點あると共に歸點あり。出發點は即ち到着點となり居るのである。而して高御座が宇宙萬有の中心點となり居るが故に、人類萬有はこの中心點より出でてこの中心點に歸る。この中心點は人類萬有の標準である。これを遠く距たるは退歩にして、これに近附くは進歩である。この中心點より出でたる人類萬有なるが故に、また悉く中心を有し居らざるものはない。中心としての高御座の周圍は悉くこれ中心となり居るのである。故に主觀としても客觀としても中心なきものはない。中心なき時は存在し實在すること能はざるものである。如何なる事物でも、中心なきものはなきと共に、その中心以外には分派的中心が到る處に存在し居るのである。分派的中心は到る處に存在し居れども、その分派的中心を貫き居るの中心は唯一不二のものである。何ものでも分派中心の中心は唯一不二である。これ大宇宙到る處中心在りと雖も、その中心の中心たるものは唯一不二のものである

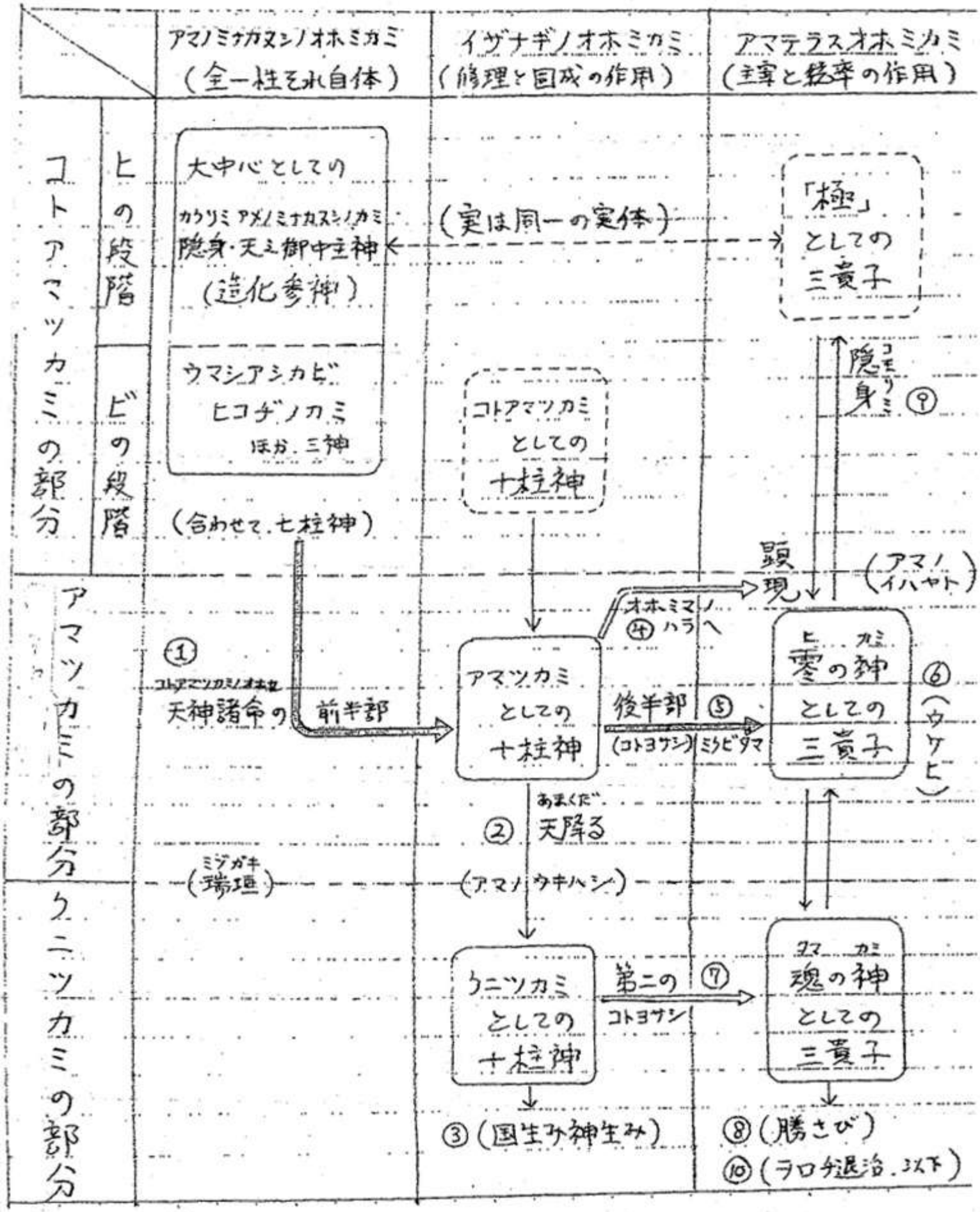
天御中主大神

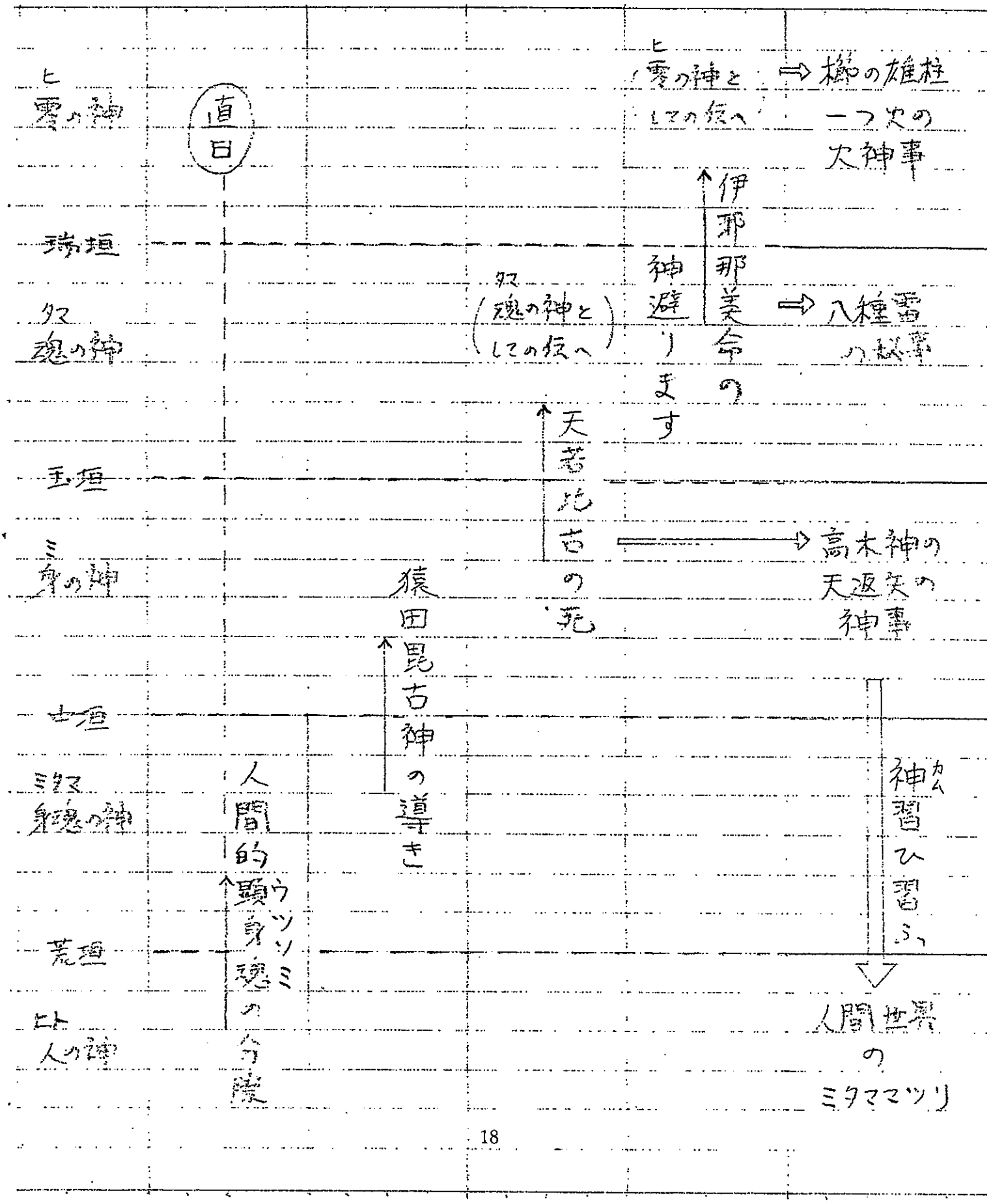
古事記神話の解釈


(国 四界) 宇宙
(時間の流れ あり)
無宇宙 (天 神界)
(時間の流れ なし)
① コトアマツカミ 別天神
イザナギノミコト
イザナミノミコト
イザナギノカミ
イザナミノカミ
・アメノミナカヌシノカミ
隠身(カクリミ)が顕在化
② 国生み・神生み
14島・35神
③ ヨモツクニ 黄泉国
(イザナギとイザナミの分離)
イザナギノオホミカミの
④ オホミマノハラヘ 御身之禊
アマテラスオホミカミ
アマテラスとスサノヲの
⑤ ウケヒ 宇気比
5男神・3女神
(神界には罪事など存在しない)
天つ罪・国つ罪の発生
⑥
⑦ アマノイハヤト 天石屋戸
高天原の完成
スサノヲノミコト
⑧ ミケツカミの解体
五穀の種
⑨ ヲロチ退治
スガノミヤ
瑞垣(ミヅガキ)
中津国・黄泉国
高天原

オホミカミ　コトアマツカミノオホセ

図表：大御神と天神諸命




ヒ 霊の神
直日
瑞垣
タマ 魂の神
玉垣
ミ 身の神
古垣
ミタマ 身魂の神
荒垣
ヒト 人の神
ヒ 霊の神としての仮へ
⇒ 櫛の雄柱 一つ火の大神事
伊邪那美命の神避ります
タマ 魂の神としての仮へ
⇒ 八種雷の試事
天若比古の死
⇒ 高木神の天返矢の神事
猿田毘古神の導き
人間的顕身魂の分霊
ウツソミ
神カム習ひ習ふ、
人間世界のミタママツリ

はてしと神の零ヒ

隱身天之御中主神

高御産巣日神（イザナギ／カムロギ）

神産巣日神（イザナミ／カムロミ）

はてしと神の魂タマ

天照大御神

月読命

建速須佐之男命

はてしと神の身ミ

皇御孫之命

石長比売

木花之佐久夜毘売

と称

へまつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては

葦原醜男（大国主の別名）

意富耶馬台須米良岐美（オホヤマトスメラギミ）

八重事代主（大国主の息子）

と称へまつるのである。

天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し、「人類世界の中心」として機能することによって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、アシハラシコヲとやへコトシロヌシの諸力をも行使できるようになるのである。

ところがその国は本来神魔包括の◎ヒの神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。アシハラシコヲは生大刀、生弓矢で八十神を平定する修理の諸力。

阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしましますことと拝承しまつる。

やへコトシロヌシは話さまとめる、などの国成（ウムナリ）の諸力。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の躰にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

神ながら、教へのままに、成り成れる、新宮處。須賀須賀斯加茂。

第六節

想はずも、問題が極祕のことに渉つたために、幾度か筆を擱きながらも、また續けて來ました。けれども、「二河白道の誓約」を說き、「天宇受賣・比良夫貝の祕」を語るやうなことは、天津神・國津神たちの賞で給はぬところ。寧、魔神邪鬼の來り窺ふこととなる。それ故、その人にあらざれば、其の身を破り、其の國にあらざれば、其の國を亡ぼすのだと、固く誡められてある。

ところが、古典は、大半其のやうな祕事に屬するから、解釋などすること無く、專念一意、唯唯、拜みまつるべきである。禪僧が、大般若經理趣品を佛體として禮拜供養するなどは、之と等しき一例である。

「古典は解くべからず」と、「守護神（ミマモリノカミ）」は教へさせ給ふ。守護神（ミマモリノカミ）と白しますのは、人の身を地球上に降し給ふと共に、その終生を守護し監督して離れることの無い各人各自の主神にてましますのである。

ところで、人の生れて來たに就ては、各自各自に其の天分が存る。その各人各自の天分は、「產土神（ウブスナノカミ）」の與へ給ふところで、須佐（スサ）の神性（カムサガ）に依るのである。之を言ひ換へると、人の生れるに就て、その箇性は、產土神から受け、その類性は、鎭守神から授かると白すのであります。

さうして、その受け得たる天分を完全に發揮することは、鎭守神の守護に依るのである。天與の天分は產土神から受けても、之を養ひ育てて開花結實させるのは鎭守神である。

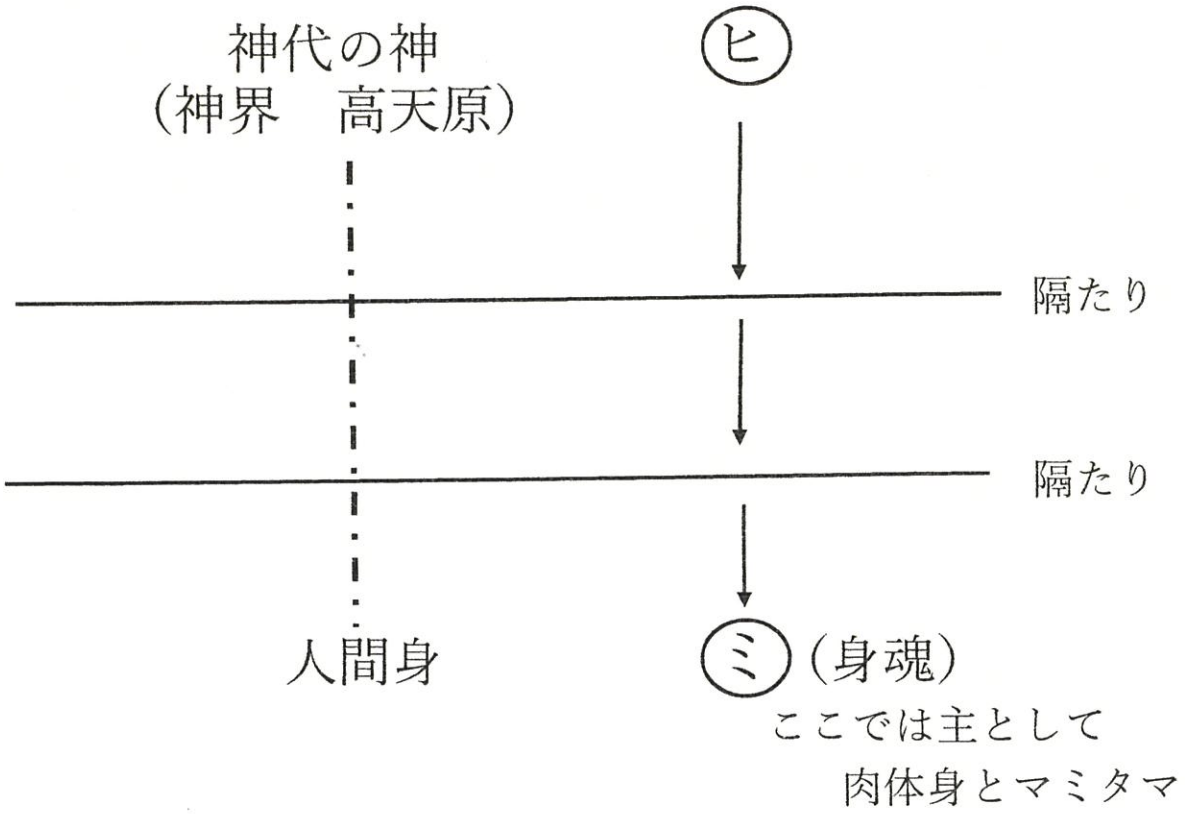
古事記は、その劈頭に、「高御產巢日神・神產巢日神」と稱へてあるが、之は神代の神の御上で、人間身の出生を教へたのではないから、「日」の字を用ゐ、日本紀の「高皇產靈尊・神皇產靈尊」と記して、「靈」の字を用ゐたのと同じやうに、「ヒ」の神の御事と拜するのである。

ひのかみの、かみわざなりて、ながむれば。あめつちは、いまや、みすまる。あめつちは、いまぞ、わかる。はるひめ、しらすはるのは、かみのはな、いまさかりなり、おほひるめのひたかのみのくに。

その國は「日」の國で、その神は「日」の神で、人間身の未成らざる神界の事理である。さうして、清陽と重濁と、或は、精粗と、厚薄と、樣々の異別は有るが、眞理は一貫して變らず、事實は眞理を離れるわけが無いから、人間身も、神代の事理をそのまゝに、「ムスビ」「ムスビ」し「ミ」である。唯、その神界を出でて幾度轉。神代を去ること幾時空。そこに隔りが出來たのである。隔りを我と我が身に築いたのである。

もしも、其の隔つるものを取り去るならば、この身此のまま、神代の神に連るので、生死一貫、顯幽一途。日神の⊗の 炎(ミヒクリ) 指し透るのである。その上で拜みまつれば、產土神とは、神產巢日神祖命にてましまし、鎭守神とは、高御產巢日高木神にてまします。

天(アマ)なるや、天(アマ)の返し矢、天離(アマサカ)る、夷女(ヒナツメ)の子が、神ながら、氷目矢(ヒメヤ)を受けて。神守る。眞賢木立てて。高知るや、天(アマ)つ國玉。高彈くや、天(アメ)の詔琴。人の身を、神とはすべく、人皆を、日止と成すべく、大虛空、焚き



隔たりを取り払って考えれば
人間神もまたヒノカミに直結している
（生死一貫　顕幽一途）

逆に言えば日神（中心）の ミタ 光 のミヒカリが
「今ここ」にさしとおって
「今ここ」もまた高天原の一部であると解るようになる

→そうすれば、産土神が神産巣日神のウツシオミで
鎮守神が高御産巣日神のウツシオミである
と解るようになる

古事記の記載は、一見まことに複雜ではあるが、

第一章は、別天神の神界記であるから、之を數理觀から言へば、最初に一を教へ、その一は、三から成り立つて居り、その三は、經と緯との二であるからとて、時間と空間とを現し來る本體としての零を知らしめたのである。

第二章は、宇宙成壞の垂示であるから、時間と空間との二つが一つになつては十で、その十が別れては、破壞と呼ぶところの死で、その死も結び來れば、建設と呼ぶところの生で、成で、此のやうな變化は、二、三、四、五、六、七、八、九と稱するので、その成り餘れる三、五、七、九の四と、成り合はざる、二、四、六、八の四との合ひては、八である。此の八に依つて、宇宙の萬有は制御せられ整理せられて平衡を保つことが出來るのである。

第三章は、高天原築成の祕儀である。之をミソギと呼んで、三十神界の生滅起伏である。

第四章は、罪惡觀で、數の分散である。

第五章は、高天原開闢記で、三十六の聚散離合である。

第六章は、罪惡觀の第二で、復活の垂示である。五の百倍と、百の百倍と、千の千倍との九である。と云ふと、ひどく普通學には遠ざかるが、神界の事理が複雜なのであるから、祖神垂示の數理觀は懇切叮寧であつても、之を理解することは、まことに容易ではない。で、以下之を省略することとしよう。

第七章は、中心觀で、箇體成立の原理に立脚して、國家觀を教へ、特に日本建國の精神を明にされたのである。

第八章は、綿津見宮と日少宮、產土神と鎭守神との關係を說示したのであり、

第九章は、死生解脱の祕を教へ、

第十章は、宇斗の神言靈を垂示されたのである。此の神言靈は、一言の萬城主の主るところで、古事記は之を下つ卷に記されたが、事實は勿論神代紀である。

神の代の、神の祕事。人の身の伏し仰ぎつつ。今日もかも、國平けく。明日もかも、うら安くこそ。內外隔てず。

靜寧和平の神國樂園を築くには、唯是、爾が身を爾自、倭の青垣東の山の上に齋き祭ればよいのである。

產土神の神德（ミハクラキ）は、そのまゝ「ハハ」と成り鎭守神の神德は、そのまゝ「チチ」となる。合せては「ミオヤ」と呼ぶ。爾（ナ）が身は、固より「チチ」と「ハハ」との一つ身なれば、「ミオヤ」である。

ちち、はは、みおや、みおや。なべてのひとびと。わが、さきのよの、ちち、はは、みおや、みおや、われに、ゆかりある、なべての、みみたま。みな、ともに、さとり、さとる。さとり、さとれば、あまねく、ひとつなり。ああひがてんじんゆうあいこう。と、たたへまつるなり。

日本の古典は、之を傳へて、

天照大御神・天照皇大御神・天照坐皇大御神・大日孁貴尊・大戸日別神。

と、拜みまつるのである。固より、神代の神にてましますと共に、百八百萬魂神と御顯れ給ひつゝまします天津神・國津神なりと拜みまつるのである。

天津神輪、國津神輪の神挂り。かゝりて今ぞ、伎美が生れます。

別れては遇ひ、遇ひてはまた別れ、破れては出來、出來てはまた破れ、生れては死に、死にてはまた生れると、人の身は驚き騷ぐ。

伊邪那美命・建速須佐之男命・十七世神を經て造り成された出雲八重垣妣の國は、伊邪那岐大御神・天照大御神・天忍穗耳命・天津彦彦火瓊瓊杵尊の神の日を仰ぎて、こゝに復び、地天泰平の歡聲を揚げたのである。

かみのひの、ひかるをみれば、あめつちは、こをろこをろに、むすびむすべる。

天成地定。ああ是れ、神のみ惠なり。また是れ。神の神わざなり、實に是れ。神のみ心なり、み祖の神の神挂りなり。

神魔出沒蓋如此、神國現成又是如是。生死遷轉連環無際。今日畫得矣。無經無緯唯一球體。

2019.10.22.(火)

幸265頁の説明

第一章　古事記51頁「別天神五柱」

（実際には七柱目までがコトアマツカミ、
零と一二三について述べたもの。

第二章　〃　「神世七代」

（十柱神の構成について述べたもの。

第三章　古事記53～61頁「伊邪那岐命と伊邪那美命」1～4

（国生み・神生みの神話は、
高天原の築成を表現したもの

第四章　古事記61～67頁「同」5-6

（ヨモツクニの神話は、罪について述べたもの。

第五章　古事記69～91頁（「同」7～9
「天照大御神と須佐之男命」全

（タカマノハラの神話は、
36.の集散離合について述べたもの。

第六章　古事記91～111頁「大国主神」全

（いわゆる出雲神話は、再び罪について
また、復活について述べたもの。

NO.

DATE

第七章　古事記 111〜135.（「葦原中国の平定」 全
「邇々芸命」 全

（天孫降臨神話は、中心と外郭について、
箇体や国家の成立の原理について、述べたもの。

第八章　古事記 135〜147　「火遠理命」 全（ほか、上巻あり）

（山幸彦の神話は、綿津見宮が無窮のたとえ
であること などについて述べたもの。

第九章　（149-161）　（中巻）

・死生解脱の秘（神武東征の伝説などが
これに相当か？）

第十章　（315-317頁）　（下巻）

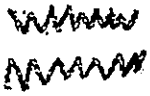
・神言霊（「雄略天皇」と「葛城山」の伝説が
これに相当か？？）

KOKUYO

チチハハミオヤミオヤのノリトの説明

固の支那文字を見よ。
□古にして□□十にして㊥にして凝固の形象なり。
而して結實なり、結晶なり。
産靈にして産魂にして魂にして、結び止めたるなり。
十なる□の蒐集したる□なる固なると共に、□に宿りたる古にして、根本魂と外郭身との團結體を指事したるなり。
之れを兒なり子なり孩なりとなす。
兒は儿なる人の宿るところにして宮なり。
子はかがまりたる人なり。
他に依據するものなり。
孩は子女の未自立し得ざるものにして、唯其の核在るのみなりとの義なり。
常陸國に小田と北條との二村有り。
鎌倉時代より今に至るまで相鬩ぎ相爭ふて止まず。
北條の水を小田に分たず。
小田、之れが爲に耕耘にたへず。
仇敵境界を接するを亥と云ふ

孩の図



之れを八八と云ふ。
母胎に住み母血を吸ひ母乳を呑み、母を食料として生活せるもの即、孩なり。
而して母は之れを喜び、之れを愛撫し、之れを養育す。
これをマンコと云ふ。
七の妙用なり。
カミヨは七にして五にして八にして百にして千にして萬にして一二三四五六七八九十百千萬にして零なり。
之れをチチハハと呼び、ミオヤとも、オヤとも称へまつりてアメツチノカミワなる資料なり財貨なり。
あちめあちめあちめあちめあちめ。
ああひがてんじんゆうあいこう。
ちちははみおやみおやみなともにさとりさとる。さとりさとればあまねくひとつなり。
あすばかすやぞ。さからかすやぞ。
おおおおおおおおおおおお。
ああひがてんじんゆうあいこう。

零(一)に内在する原理として、一二三(ヒフミ)があるように、

空零(六)に内在する性質として六七八(むなや)がある、と考えて良い。

○と が二重相としては◎つであるが故に、

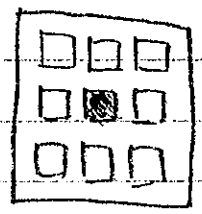
それは◎ミとなり「零(ヒ)の自己組織化」が可能となる。

同様に、空零もまた状況次第では陰陽不測の〆となる。

母としての〆と子としての〆の離合集散によって、また

固体分成をする。これが〰と描く「七の妙用」である。

(九)



(九→十)

九は中心(一)と外部(八)
これを一つにまとめて十とする。

大宇宙の大中心たる命（みこと）の命（みことのり）の遮迦遮迦なれば、往くも還るもアアヒガテンジンユウアイコウ（南無阿弥陀佛）と称へ奉らば、此の土此のままの高天原にして、此の身このままの示にして尊にして天皇にてましますなり。

言靈の幸と云ふことは昔から教へられて居るが、私の知って居る人に九十三歳の長壽で高天原に歸られた婦人が居ったが、夫れを高天原に往生したとは何うして知れたかと申しますに、其の人は最早此の世界にお暇をする時が近づいたと申して、飲食物も極めて淡泊な物にして言靈のみを唱へて居りますと、次第次第に其の手の色が美しくなって来るので、看護の人々が不思議がって話し合ひながら一緒に言靈を唱へて居たところが、次第次第に美しくなった手が透き徹って来て、まるで水晶の玉を見る様になったまま言靈奉称の聲と共に高天原に歸られたのであります。

既に聲の絶えた後までも其のまま玉の如な美しさは変らなかったので、其れが高天原往生の證左なのであります。

此の世界を去る時でなくとも言靈奉称の功を積めば此の身此のまま白玉身となるので其の暁を神の人と讃美するのである。

神の人とは尊であって、日本歴史に傳へたる瓊瓊杵尊・火火出見尊・天鈿女尊とは皆、此の神の人で、大宇宙の大中心としての解脱（さとり）の中に在られたのである。

未来

十字架の信仰 (三)

前号で、この第一章の解説は済んだやうである。けれども、読者が果して満足してくれるかどうかは疑はしい。で、改めて「未来」の故郷篇以下を読みかへして見るに、同工異曲、殆んど各篇共通して此の「十字架の信仰」を説いてある。否。否。太古以来各国各地の聖者哲人は皆共に等しく是ㇾを説示したに過ぎない。然うしてそれは畢竟するに「カミ」の教へであり、「カミ」が人をして人の世界を完成させようとの慈悲心を伝へたに過ぎない。

然り。然れども、不幸にして人類万有は皆共に神魔の体であり用であるが故に常時不断に神界と魔境とを往返去来出没旋回して居る。随って神聖国体をも築けば亡口乱世をも現出する。平和安楽を謳歌するかと見れば戦乱闘争をも演出する。相互に祝福し相互に呪詛し相互に扶助し相互に排撃す。唯、然しながら「カミ」は人の子を憫みて「カミ」の言霊(コトタマ)を教へ「カミ」の神事(カミワザ)を授け「カミ」の数数(カズカズ)を与へて「カミ」の完きが如く完からしめ給ふ。

故郷篇第二章に、

「人の呼吸は必先づ出してから後に入れるのだと云ふことを生児が教へて居る。」とあるのは「十字架の信仰」は宇宙の真理が事実として顕現されたものであることを示したのである。

「真理は唯一つだ」と先師は居常お教へになられた。人をして人たらしむる道は唯此の十字架の信仰である。それは、身を殺して仁を為すものであり、畏も

日本天皇の御教に

己が身は顧みずして他(ヒト)の為尽すぞ人の務なりける。

と仰せられしところである。

伊邪那岐大御神が「御身之禊(オホミマノハラヘ)」に於て、玉体赤裸にして三貴子と化する道を示され、悉達多太子が虚空定に入りて仏陀と化し、耶蘇が広野に在りて基督たる実を示したるが如く、一切を捨てたるものが、はじめて、一切を得るのである。三貴子(アマテラスオホミカミ)はその神言を伝へて、

ア ア ヒ ガ テ ン ジ ン ユ ウ ア イ コ ウ

なりと宣ふ。またその神象(ミスガタ)を示しては、○

なりと知らしめ給ふ。その神数は、

・ ： ∴ ∵ ⁘ ⬚ ⬠ ◎ ⁞⁞ ◎

にして、

◎なりと教へ給ふ。（「編者註」○より◎までの記号は赤字）

之れを統一体だと呼び神国浄地だと讃美するのである。「タカマノハラ」とか「浄土」「天国」などと伝へたの

これらの「その」は三つとも、「大御神が玉体赤裸にして三貴子と化する道を示されたこと」それ自体を意味している。

宇氣比

多田山公口 祕稿

山外一塊土又是一國光裡過客。

神の宇氣比に依るが故に、人間の身も神の完きが如く完全ならんと志し善惡邪正是非曲直を判別し得るに到るなり。

宇氣比の宇は極小の音、氣は產出にして箇體、比は日にして魂にして氷にして⊙にして⊗にして田にして國なれば、宇氣比とは極大極小の靈が結び成したる最大最小の神界樂土にして、又、其の主神にして司神にして狹霧にして伊吹にして三女神にして五男神にして天安河にして建速須佐之男にして月夜見月弓月讀命にして天照大御神にして御倉擧板神にして稻倉魂にして怪奇異靈の存在なり、大氣津比賣にして保食神にして豐受比賣にして、女にして芽にして目にして四にして沃土樂地にして、陰にして陽にして陰陽不測にして神なるなり、四象にして兩儀にして太極にして無極にして極無極にして極大極小にして日止なる四象にして日月にして易なり。

和身魂にして幸身魂にして奇身魂にして咲身魂にして術魂にして、塩土翁なる九魂にして、大日本天皇たる荒身魂にして、眞身魂にして、生玉にして足玉にして玉積魂にして神魂にして高魂にして、底度久御魂にして津夫多都御魂にして阿波佐久御魂にして、大國魂にして、生嶋にして足嶋にして、大日本豐秋津根別にして、大八洲國にして八神殿にして、八尋殿にして、天御柱にして國御柱にして、神世七代にして五代にして八代にして、八百萬魂にしてミタマなるなり。

御魂にして魂にして身魂にして箇體なる宇宙にして、日にして日神にして、月にして月讀命にして、黃泉幽界にして、明闇にして零にして、十なる十字架にして、白玉身にして緋色（ひかり）にして、天津神にして、國津神にして、天神地祇にして綿津見にして山祇にして、國常立にして天常立にして、國常尊なる可美葦牙彦舅にてまします なり。

阿知米にして阿阿比賀天吽爾吽由宇阿伊固宇にてまします なり。

一二三四五六七八九十にして一二三四五六七八九十百千萬にてまします三十二人供人にして五供緒にして十種神寶にして三種神器にして三重子にして三貴子にして比咩にして比古にして神魔にして凹凸にして、如是にして如如にして如來にして、死生觀にして、生死遷流にして、不生滅にして、生不生にして滅不滅にして如如去來なりとは云へるなり。

これをヒフミなりと云ふなり。

ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリなりとは云へるなり。

以上

昭和十一年十一月十一日夜半

第九章は、死生解脱の祕を教へ、

第十章は、宇斗の神言靈を垂示されたのである。此の神言靈は、一言の萬城主の主るところで、古事記は之を下つ巻に記されたが、事實は勿論神代紀である。

神の代の、神の祕事。人の身の伏し仰ぎつつ。今日もかも、國平けく。明日もかも、うら安くこそ。內外隔てず。

靜寧和平の神國樂園を築くには、唯是、爾が身を爾自、倭の青垣東の山の上に齋き祭ればよいのである。

產土神の神德（ミハクラキ）は、そのまゝ「ハハ」と成り鎭守神の神德は、そのまゝ「チチ」となる。合せては「ミオヤ」と呼ぶ。爾（ナ）が身は、固より「チチ」と「ハハ」との一つ身なれば、「ミオヤ」である。

ちち、はは、みおや、みおや。なべてのひとびと。わが、さきのよの、ちち、はは、みおや、みおや、われに、ゆかりある、なべての、みみたま。みな、ともに、さとり、さとる。さとり、さとれば、あまねく、ひとつなり。ああひがてんじんゆうあいこう。と、たたへまつるなり。

人にそれを語らせるためのコトタマと

日本の古典は、之を傳へて、

宇宙の側も含めた「大宇宙」としての高天原

七 手に持ち加減に結び束ねて。
八 空笥(槽)即ち空っぽの入れ物を覆せて。
九 踏み轟かし。
一〇 神が人に乗り移った時の状態になって。書紀には「顕神明之憑談」とある。
一一 胸の乳をあらわに出し。「掛き」は接頭語。
一二 裳の紐を陰部まで押し下げて垂らした。
一三 不思議なことだとお思いになって。
一四 岩屋の内からおっしゃったことには。
一五 ただ天の原とあって高天の原と言わないのは、天上界での出来事だからである。
一六 ウタマヒと訓んでもよい。歌舞の意。
一七 あの真賢木にかけた鏡。
一八 一層不審に思われて。大御神の御姿がその鏡に映ったので、それを別の神と思われて一層不審を抱かれたと解するのは誤りである。鏡は太陽の象徴(日像)であったので、それを見られた大御神は、別に太陽神がいると思われて一層不審を抱かれたのである。
一九 そろそろと。徐々に。
二〇 お窺いになる時。
二一 引き出すや否や。
二二 今の注連縄のこと。書紀には「端出之縄」にシリクメナハの訓注がある。
二三 還り入ってはいけない。
二四 協議して。皆で相談して。
二五 書紀の一書には「科二…千座置戸之解除一(ハラヘ)」とある。千位(千座)は多くの物を置く台、置戸は置く品物の意。即ち多くの台の上に置くおびただしい品物を科する意。罪穢れを祓い贖わせるために科する祓つ具(つもの)である。雄略紀に歯田根命という人が、「以二馬八匹、大刀八口一、祓二除罪過一。」とあるのが参考となる。
二六 書紀には「使レ抜レ髪」とある。

布刀詔戸言禱き白して、天手力男神、戸の掖に隠り立ちて、天宇受賣命、天の香山の天の日影を手次に繫けて、天の眞拆を縵と爲て、天の香山の小竹葉を手草に結ひて、小竹を訓みて ササと云ふ。天の石屋戸に汙氣此の二字は音を以ゐよ。伏せて蹈み登杼呂許志、此の五字は音を以ゐよ。神懸り爲て、胸乳を掛き出で裳緒を番登に忍し垂れき。爾に高天の原動みて、八百萬の神共に咲ひき。

是に天照大御神、怪しと以爲ほして、天の石屋戸を細めに開きて、内より告りたまひしく、「吾が隱り坐すに因りて、天の原自ら闇く、亦葦原中國も皆闇けむと以爲ふを、何由以、天宇受賣は樂を爲、亦八百萬の神も諸咲へる。」とのりたまひき。爾に天宇受賣白言ししく、「汝命に益して貴き神坐す。故、歡喜び咲ひ樂ぶぞ。」とまをしき。如此言す間に、天兒屋命、布刀玉命、其の鏡を指し出して、天照大御神に示せ奉る時、天照大御神、逾奇しと思ほして、稍戸より出でて臨み坐す時に、其の隱り立てりし天手力男神、其の御手を取りて引き出す卽ち、布刀玉命、尻久米此の二字は音を以ゐよ。繩を其の御後方に控き度して白言ししく、「此れより内にな還り入りそ。」とまをしき。故、天照大御神出で坐し時、高天の原も葦原中國も、自ら照り明りき。

是に八百萬の神共に議りて、速須佐之男命に千位の置戸を負せ、亦鬚を切り、

昭和十九年六月二十五日　滿洲國奉天省熊岳城禊所に在りて此の解説を了る。

(1) 豫母都志許賣の神事成り成る時、天窟戸は開け闢けて、八百萬神は、相互に手を拍ち、慶祝して云はく、

「あはれ・あなおもしろ・あなたのし・あなさやけ・おけ」

と。

日本古典多しと雖、古語拾遺ひとり此の祕言を傳へたのみである。

(2) 一方、太玉の太幣帛を捧げまつりて、天宇受賣の祕神挂と成り、八百萬神は、日神の御田の身魂であることを實證得るのである。

(直日)　(天照大御神)　(1)

「あなうれし・みたのみひかり・さしとほり・あめのうずめが・むなちもも・ちよろづみたま・なりなりて・ひふみよいむと・うけふねを・ふみとどろこし・あめつちに・きゆらかすやぞ・あめつちに・さからかすやぞ・あちめ・あちめ・いうをえやあと・うけふみたりや・あちめ・あちめ・あちめ・ああひ・ああが・ああ(2)(3)ひがてんじん・ああひがてんじんゆうあいこう。」

よしありと、ひとこそみらめ、みづうみの、ゆふべをぐらく、ふえのひびくを。

以上

言靈の幸

第二篇　豫母都志許賣　完

「よし由ありと、人こそ見らめ、湖の夕べ小暗く、笛の響くを。

暗くて笛を吹く人の姿は見えなくても、笛の音が聞こえるからには、どこかに必ず笛を吹いてゐる人はいるはずである。それと同じように、高天原それ自体は見えなくとも、このコトタマによって、高天原はもう「今、ここ」に現出しているのである。ということを説明したウタである。

無宇宙の神（元型） —神習う（カムナラ）→ 宇宙の人（実際）

神国の築成	天照大御神 （アマノイハヤにこもっており、高天原葦原中国ことごとに暗し）	根本魂直日
	アメノウズメの舞い踊り	神国の築成に努めるコトタマ
↓	↓	↓
神国の完成	アマノイハヤトが開けて世界が明るくなる。	ナホヒの霊力が発揮され全身に満ちわたる。
	あはれ、おなおもしこへ	神国の完成を喜ぶコトタマ
	⇩	⇩
外郭	ヤホヨロヅノカミ 八百萬神 （日神の身魂） ヒノカミ　ミタマ	マガツビノムシ 肉体身など （→神となりたるマガツビ）

NO.

DATE

「極大極小」　　(ヒ)の段階

人間の身では理解できない。

(ビ)の段階

アマノイハヤト
(人間の認識能力の限界)

「最大最小」　　(ヲマ)の段階

人間の身でもかろうじて理解できる。

(直日)　　(最大最小の神界楽土)

歪められることなく
きれいに直結できた時、

無宇宙の実在が持つ諸力が、
そのまま人間世界に実現する。

人の身ながら
神となる。

この土このまま
高天原

↑コトアマツカミ

↑アマツカミ

↑クニツカミ

(ヒノカミ)無宇宙

↑

ミヅガキ瑞垣

↓

宇宙(タマノカミ ミノカミ)

KOKUYO

NO.

DATE

第118頁

② 天照大御神 (日神)

①↓

その御田の身魂 (八百萬神) 人間では直日

高天原のアマツカミ

×100.

②

(百八百萬、天津神国津神) 人間の身魂

①の関係性と②の関係性は等価であり、

それだからこそ「高天原の八百萬神(人間では直日)」を

「日神の御田の身魂」と表現することができるのである。

⇒これが出来上がって、八百万神(直日)がそれを祝う

段階が①となる。

KOKUYO

神魔交錯、日月生誕。三神二靈、如如出入。櫛之雄柱、本來雷火。諸册祕契、脩禊神殿。

第十二の、「天石屋戸開」とは、大禍津毘としての須佐之男の神性の荒び狂ひたまへる結果、「高天原も皆暗く、葦原中國も悉闇く、常夜の中に、萬の禍神は狹蠅成し、妖類魔族の領地と化した」「そこで、八百萬神は、天安河の河原に神集ひ集ひて」とあるやうに、災禍汚濁窮苦の極度な場合、或は、生死の境界線上に立ちては、本然の自性が呼び起され、飜然として其の本に歸らんとすることから初まる。「神集ひ集へる八百萬神は、高御產巢日神の御子思金神に思はしめて」「常世の長鳴鳥を集めて鳴かしめ、色色の工人と資材とを集めて、鏡と珠とを作り、木綿と麻とを取りて、眞賢木に著け、太御幣として、太玉命がそれを持ち、天兒屋命が太諄辭を白し、天手力男神は、戸の掖に隱り立たし、それぞれの準備を整へた」既に反省した諸神は、固く閉ざされた窟戸を何うして開くべきかと工夫を回らすのである。

天窟戸とは抑、何であらうか。天照大御神の隱らせ給ふ宮である。此の宮に坐しますは「隱身」の神なること固よりであらう。「天之御中主神・高御產巢日神・神產巢日神の三柱は、三柱にて一柱の神なる隱身にてましますなり」とある。

諸神は、天窟戸を開きまつらんとして、色色樣樣の物を集め、用意を整へ、最後に、「天宇受賣命が、天之石屋戸に汗氣伏せて、踏み登杼呂許志」「裳緒を番登に忍垂れた」そこで、「八百萬神哄笑、高天原震動」「天石屋戸開闢。天照大御神出御。高天原も葦原中國も、おのづから照り明り、相互に相見て、相互に慶祝歡喜。手を拍つて云はく、阿波禮、阿那面白。阿那多能志。阿那清明。意計」と。

八百萬神の相集るものは、擾亂を平定して、主神の出御を仰がんが爲であり、八百萬神の神智は、神器を作

畫くのは、陰陽和合で、地天泰平なので、和魂（ニギミタマ）たる大平等海裡に、直毘（ナホビ）としての火を孕めるもので、古言に、「フフム」と傳へたるところ、「フフム」とは、祓禊の義であると共に、その結果でもある。祓言としての「フ」と、「フ」とを重ねて、それを結ぶに、「ム」の音を以つてして一語を成したので、生産の義で、産靈で、産魂で、産靈産魂である。その産靈産魂結び止めたる玉緒を、「ミヅホ」と呼ぶ。

玉の緒を、結び結びて、人の身は、伊着くなるなる、天安河。

「タマノヲ」とは、「五伴緒」で、「八十神」で、「八上比賣」で、神としては、「八神」で、人としては、「八千魂」で、「八十萬魂」で、物としては、分分個個で、天上にては、群星で、地下にては、妖類魔族で、分散しては、邪惡醜陋で、死と呼ばれ、統一しては、善美正誠で、生と云はるるのである。

ところが、人は生を喜び、死を惡む癖が有るので、「タマノヲ」をも、「命（イノチ）」と呼びて、生けるものとか、生くべきものとかの義に用ゐ來つた。けれども、「タマノヲ」も、「イノチ」も、本來は生死を通じて、千變萬化する靈魂（クシビ）なりとの義で、「ヒ」を活用の方面から觀て名づけたのである。それで、それがまた直に、燃ゆるものであり、流るるものであり、上るものであり、下るものであり、暖きものであり、冷きものであり、尊きものであり、卑きものであり、天で、地で、陰で、陽で、死で、生で、水火である。それで、「ミヅホ」と呼ぶのである。

「ミヅホ」の「ミヅ」は、水（ミツ）で、滋潤（ミツ）で、稜威（ミツ）で、瑞祥（ミツ）であつて、經（タテ）と緯（ヌキ）とで、十（トヲ）である。その「ホ」とは、火（ホ）で、穂（ホ）で、秀（ホ）で、高く明に顯れたるものである。此の二語を合せたる「ミヅホ」とは、奇靈異變の實體であり、妙用であるとの義で、それをまた、稱詞として「水穂國（ミヅホノクニ）」と用ゐては、萬物備はりて、瑞祥到り、稜威赫灼として、百姓潤澤なるもので、太平嘉悅の神國樂園なりとの義である。

おけ。

天神諸命(三)

アハレアナオモシロアナタノシアナサヤケオケ。

二十一音一語にして一言なる天照大御神天照皇大御神天照坐皇大御神の神言なり。

アハレアナオモシロアナタノシアナサヤケオケ。

之れを五言なりと傳へたる素部貴成、大同二年二月十三日、古語拾遺として綴れるもの、遂に後人を誤らしめたるは惜むべきかぎりなり。

アハレアナオモシロアナタノシアナサヤケオケ。

二十一音一語の神言靈なることは、

アマテラスオホミカミアマテラススメオホミカミアマテラシマシマススメオホミカミ。

三十八音一語の神言靈なるが如くなれども、其のアマテラスオホミカミと称へ、アマテラススメオホミカミとも、アマテラシマススメオホミカミとも称へまつる神言靈が各別の神言靈なアナオモシロと云ひ、アナタノシとも、アナサヤケオケとも云へる各別の神言靈も皆、各別に別義の神言靈なるなり。

(中　略)

「アハレアナオモシロアナタノシアナサヤケオケ」と称ふるは、「アアヒガテンジンユウアイコウ」と称するに似て異なるところあり。

一

天照坐皇大御神天照皇大御神天照大御神と称へまつるがアアヒガテンジンユウアイコウと同義にして、「アハレアナオモシロアナタノシアナサヤケオケ」と称へまつるは天照大御神天照皇大御神天照坐皇大御神と称へまつると同義なれば、此の神言靈は天照大御神出生の暁、諸神が讃へ仰しまつれるなりと傳へたるなり。

二

蔵菱の暁にして神人の神言靈なり。

オホヒヒルメムチノミコトの神言靈なるなり。

アスバカスヤゾサカラカスヤゾオオオオオオオオと称へまつると同義なり矣。

以上

昭和十一年八月二十五日

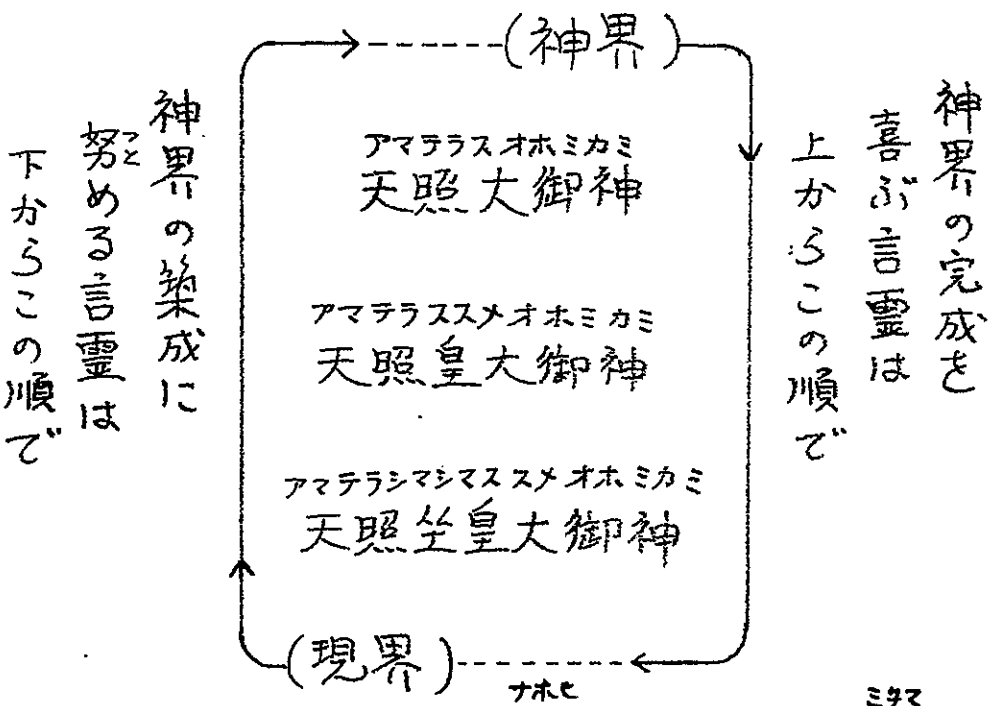
神界の完成を喜ぶ言靈

(三つの神名を逆の順で唱えると、別の意味(右記)になってしまうので、注意を要する。)

神界の築成につとめる言靈

他、「ヒフミヨイムナヤ ココノタリヤ モモチチミテリ」など

二種類の言霊の区別とそのイメージ



直日(ナホヒ)の力を強め、全身魂(ミタマ)に行き渡らせるコトタマ。

(一) 神界の築成に努める言霊 ⟶ 禊行事の中で用いる。

1. アアヒガテンジンユウアイコウ（十四字秘言） アアガ ⊙
2. ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリ ⊙ヒト（ヒフミヨイムナヤコト）
3. 天照坐皇大御神、天照皇大御神、天照大御神（上述）
   ⊙作用　○境地　⊙実体（人間では直日（ナホヒ））

(二) 神界の完成を喜ぶ言霊 ⟶ 各別の行事の中で用いる。

1. アハレアナオモシロアナタノシアナサヤケオケ
   幸118頁の①
   （オホヒヒルメムチノミコトの神言霊）
2. アスバカスヤジサカラカスヤジオオオオオオオオ
3. 天照大御神、天照皇大御神、天照坐皇大御神（上述）

て居る。

亦、或者は當然なる奇蹟で何如なる人人も此の如くにして生れ来るので、唯、人人が其の理を知らざるが故に奇蹟と称するまでで、奇蹟ならざる奇蹟であるとも説明して居る。

ところが、

日本書紀にも、

舊事紀にも、

『淡路を胞として御子生み給ふ』

と記してある。

此の記紀の文を對讀すれば、初に『御子生み終り給ひ』とあるは『淡路を胞として』で、肉體身たる箇體を産出したと云ふので、次に『祓禊』は神人産出の秘事であることが知らるるのである。

『三貴子を得給ふ』とあるは祓禊の結果なので、祓禊は三貴子を得らるるのであるとの教である。

三貴子とは古事記にも日本書紀にも『三貴子』と讃美して居るところの神なので、一神（ひのかみ）で、舊事紀に『天譲日天狭霧国禅日国狭霧尊』と傳へたるところで、日本書紀に『状貌難言』と云へる国常立尊にてましますので、一神（ひのかみ）で、萬神（よろづのかみ）で、加美たる火人で、日止で、白玉で、皇で、神籬・磐境で、祓禊の結果である。

日本書紀は更に記して曰はく

『高皇産靈尊因勅曰吾則起樹天津神籬及天津磐境當爲吾孫奉祝矣。

タカミムスビノミコト ノリタマハク アハ アマツヒモロギ アマツイハサカヲタテテ スメミマノミコトノタメニ イハヒマツルベシ。

汝天兒屋命天太玉尊宜持天津神籬降於葦原中国亦爲吾孫奉齋焉。

イマシ アメノコヤネノミコト アマノフトタマノミコト ハ ヒモロギイハサカヲモチテ トヨアシハラノ ナカツクニニ クダリテ スメミマノタメニ イツキマフレ。

因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穂国是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者也矣。』

アマテラススメオホミカミ スメミマノミコトニノリタマハク トヨアシハラヒイホアキミヅホノクニハ コレ アガウミノコノ シラサンクニナリ イマシ スメミマ イデテ シラセ タカミクラ サカエマサンコト アメツチトモニ キハミナシ。

之れを熟讀すれば左の如く翻譯し得るのである。

○第一は、

高皇産靈尊としての神人は自己の身を神籬・磐境として神業を建つべきなり。

○第二は、

天兒屋命たる大宇宙の大中心としての命（いのち）と、天太玉尊たる小宇宙なるがままに大宇宙の大中心たる命（みことのり）の遊遡遊遡たる皇孫の神人としての神業を立つべく、神籬・磐境と、其の境地に在りて其の境地を築き成せ。

○第三は、

寶祚と天地と與に無窮なり。

此の三章は共に神人再生の偉容尊儀で、祓禊の結果として産出せられたる三貴子あることは

御倉板擧神

なる言靈に據って更に明瞭なのである。

ミクラダナノカミとは御頸玉の義で『玉の緒も由良に取り由良迦志て』と云へる玉緒の御名で、其の玉緒の統一魂としての神徳なりとの義である。

ミスマルミタマで、ミスマルノタマで、ミスマルミタマノカミで、ミスマルノカミで、高天原統治であるから海原をも夜国をも兼ねて統治し得たりと義で、大宇宙の大中心として實を顕彰示現したるなれば、圓一音の眞に徹したるもの、一無極・極大極小の日止にして、火人にして、人なる小宇宙なとの意で、アマテラスオホミミにてましますなり。

而して又、アマテラススメホミカミにして、又更にアマテラシマシマススメオホミカミてましますなる三貴子にして、三重子にして、三重相にして、一圓光たる一神にてましまするヤマトである。

日本であるとの意で、スメミクニなのである。

皇国で、白玉身で、ココロの結ばれたる暁である。

空零たる靈念思考乃至肉體般までを統一主宰したる天太尊なのであるから、ヤマトで、ヤマトとしてのココロで、日精神と呼ぶことができる。

之れを約言すれば、

アマテラスオホミカミアマテラススメオホミカミアマテラシマシマススメオホミカミ。

日本精神

汝は　あしはらの　なかつくにに　ましまして
この　かみことたまを
、あまねく　をしへ
あまねく　しらじめ
あまねく　おこなはしむべきものなり。

これの　おほかみことたま
これの　かみことたま　とは
阿知米。　阿宇於。　於於於。
阿阿比。　阿阿賀。
阿阿比賀天吽爾吽。
阿阿比賀天吽爾吽由宇阿伊固宇。
宇。宇。宇。宇。宇、止。宇止。宇。宇止。
功徳無量。
一念奉称者。
直往於天界而。
無迷蒙無惑乱也。
速消於罪障而。

生福徳生明智也。
能伏於衆魔而。
安人天平地界也。
日神とは称へまつる也矣。

日神の神わざ　なりなりて、
大宇大宙、皆是レ日なることを知らるるなり。
又これ火なることを知らるるなり。
これはこれ〇なるなり。
アアヒガテンジンユウアイコウ。にして、
直日とは称へまつるなり。
直日とは即天地。
天地は即陰陽。陰陽は即乾坤。乾坤は即高卑。高卑は即凹凸。
醜は即善意。善意は即真妄。真妄は即水火。水火は即〇なり。
〇は即神なるなり。
和楽にして人天を生じ。
困厄しては妖魔となる。

「アガ」の「ア」は親しみ睦む意。「吾」であり、「畔」である。その「ア」の凝りて赫灼と照り耀ける身なりとの意にて「アガ」と云ふ。

人皆は名を異にして我在りと相互にぞ知る。神の宇気比弓。

で、人が五官的に表から見れば、名を異にして相互の存在を認めて居るが、五官を捨てて裏から見れば、一円平等の「◎」である。その「ア」としての中心と仰ぎまつるなる「我皇御孫之命」は、「豊葦原・水穂之国」と呼ばるる人類世界を「カムロギ・カムロミ」と親しみ睦み和ぎながら強く堅く制御統一して逸脱せしむることなく、平和に安楽に喜び満ちたる生を、天地と共に享けよ、享けさせよ。「聞コシ食セ」。「嚙ミ嚼ミ組ミ組ミ」「組織し制御し主宰し統一して円満具足の」「統一魂神」たる実を明にせよ。と、

「事依志奉伎」

「コト」は事であり言であり命せごとで、さうして、「宇宙の大道」で、単なる命令とか希望を述べるとか依託するとか云ふのではない。勿論、強制するのでも要求するのでもない。ましてや、予言などとはまるで縁の無いことである。「是クアルベクシテ是クアル神ノ道」である。と言ふのは、「宇宙」即「箇躰」即「統一躰」。本来の筋道が然うなので、その筋道のままに、人の世人の国は成立し統治せらるべきものである。と命せられたので、治国の原理は、修身、斉家と等しく⊙であると教へられて、「中心ノ麻邇麻邇、外廓ノ機能ヲ発揮スル」のである。

中心は、「超絶ノ実在」として全躰を主宰し統率して居るのだから、その外廓を観れば、そこにそのまま、中心の「神性」をうかがひまつらるるのである。彼の相者が、一指頭を見ただけで、その全身心の正邪曲直善悪美

此の「華の神」は蓋、全宇宙神の御意志であるから、人類世界にありて、此の「カミ」のままなる聖者が国を建てては、「全人類主宰の大天皇」と称へまつるので、その国は天皇国である。

全人類主宰の大天皇を中心と仰ぎまつる人類は、中古以後、各地の歴史が伝ふる如き、又或は、現在世界に見るが如き、隣邦を切取りし、隣人より略奪して、自国自身のみの富饒強大を謀り、地球上を分割し占據するが如きものでないこと固よりである。

噫。

旧邦は既に廃れた。

人は皆、全力を捧げて、新邦の築成に励まねばならぬ。

その新邦の目標は、「天磐座」である。

「アマノイハクラ」と云ふのは、下も上も内も外も、スミスミテ　スミキリタル　もので、それは、

「山裡清明」である。

山裡清明の文は、仮借なること勿論で、外から見れば、ガヤガヤ　ゴチャゴチャ　と騒ぎ乱れてゐるものも、中は　スミスミ　て、静に穏に　キレイ　だとの義である。

「山」とは、水平面から凸出したので、顕著なので、支那人の象形文である。日本語では「ヤマ」と呼ぶ。

「ヤマ」の「ヤ」は、「八」であり「矢」であり、出でまた出づるものであり、「マ」は、円なので、身魂なのであるから、「ヤマ」とは、水平線上に突出隆起し、やがては、一箇独立体を築き成すもので、その極は「球」である。つまり、「小宇宙」で、経と緯とを有する箇体である。之れを客観すれば、現在私どもの見るが如く現

2019.6.11.

「神界の築成に努める言霊」と言う時の神界とは、

「この土このまま高天原」と言う時の高天原のこと。③

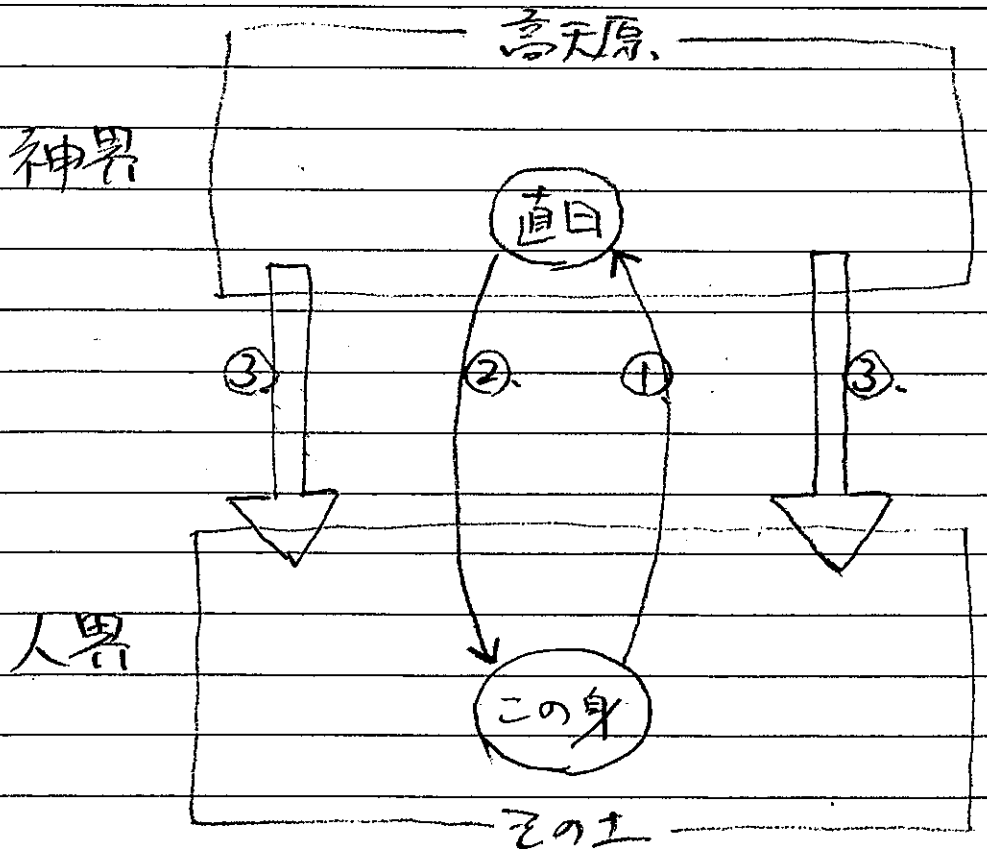
それを実現するためには、まず その高天原の中心として、

自分自身が「この身このまま神と化る」ことが必要である。

即ち、自分の本体が直日(ナホヒ)であることを正しく理解して①

その統率力を全身魂(ミタマ)にあまねく行(ゆ)きわたらせる② ことで、

「直日(ナホヒ)の人(ヒト)」となることが必要なのである。



①、②、では
築成に努めるコトタマ

③が出来て初めて、
完成を喜ぶコトタマ。

1 アアヒ ○ ―― 「ア」は大宇宙の義。他の意味ではないことを示す
ために、「アア」と重ねた。その「ヒ」なのだから、
「アアヒ」は大宇宙に遍満する霊の意味。

2 アアガ ⊙ ―― 未来231頁にも『「ア」の凝りて森羅と照り輝ける所』
とあるとおり、アアヒ○に対するアアガ⊙である。

3 アアヒガテンジン ㋡ ―― (私見ながら、テンジンは照り知らすの義か?)
そうした○でも⊙でもあるところの実在の
作用力が拡がってゆくことを意味する。
即ち、境地○、実体⊙に対する作用㋡である。
(三神即一身)

⇩

4 アアヒガテンジンユウアイコウ
人としては、自分の直日もまた⊙であると悟ること。
次に場としては、それを悟った境地としての高天原を
そのまま人界に降ろして来ること。
→全部つなげると、十四字秘言の強調文となる。
1-2-3-4.

KOKUYO